2102　離島覚書（山口県蓋井島）

令和３年４月 18 日

市営渡船蓋井丸

下関駅発７時 27 分のＪＲ山陰本線の電車に乗り、水産大学校のある吉見駅に７時 51 分に着いた。歩いて蓋井島（ふたおいじま）行の船が出る桟橋に向かう。付近に商店があるかと思い、朝食も食べず昼食の弁当も買ってこなかった。しかし商店はなく、コンビニは 1.5 ㎞も離れているという。幸い、駅前の蒲鉾屋が朝早くからやっていたのでイカ入魚天麩羅を購入して１枚食べ、朝食とした。桟橋には待合室はなく、小さな雨除けのテントが置かれているだけだった。

蓋井島は響灘に浮かぶ面積 2.35 ㎞^{2}、周囲 10.4 ㎞の小さな島である。豊浦郡豊西村の一部であったが、1954 年に下関市と合併した。吉見漁港から市営渡船蓋井丸が就航している。夏場は日に３便、冬場は２便に減便される。船の定員は 80 人で、乗組員４人である。このうち２人は蓋井島の人だ。島までは通常 35 分ほどを要する。

昨夜来の強風が収まっていない。乗組員に聞くと何とか出港できるぎりぎりの状態だという。ちなみに昨日の最終便は欠航したそうだ。市営渡船には私を含めて 10 数人が乗った。島の人と思われる老夫婦の奥さんを除くと男ばかりで、釣り竿とアイスボックスを抱えていた釣り客が最も多い。下水処理場の検査に来たと思われる人もいる。

市営渡船は８時 30 分に出港、漁港を出ると激しく揺れた。上下変動が５ｍはあるかと思えるほどで、いったん浮いて海面に叩きつけられる。このため 40 分ほどかかり、９時 10 分過ぎに蓋井島漁港（第１種漁港）に着いた。漁港には漁船が約 20 隻、磯見（いそみ）用の磯船（船外機）が 10 数隻係留されていた。昨夜から時化が続いているため出漁している船はなく、これが蓋井島の漁船勢力と考えていいのだろう。

蓋井島に来るのは、2006 年 11 月以来なので 15 年ぶりになる。この時は水産庁の漁業集

落環境整備事業の効果調査で来た。漁協で話を聞き、目的の施設を見ただけなので、蓋井島の全体像は把握していない。ただ印象に残っているのは、下関市役所の斡旋により民宿周防で食べた昼食が美味しかったことである。サザエの炊込みご飯にアワビの刺身がついた。

船を降りた先に児童公園があり、その前に漁村センターが建つ。センターの一角に島で唯一の「みなと屋」という商店があった。商店で島の地図やパンフレットを入手し、ご主人から簡単に島の様子を聞いた。バックパックを船着場にある無人の事務所に置き、先ずは集落を一望できる金比羅山に登ることにする。

吉見漁港に停泊中の市営渡船・蓋井丸（左）、金比羅山から撮影した蓋井島漁港（右）

金比羅山

集落の東側に位置する谷戸地以外は深い山で覆われ、海岸線は断崖絶壁が続く。したがって海岸伝いに島を一周する道路はなく、漁港周辺に限られる。島の西側は標高 250m級の大山が連なる。戦時中は海峡防衛のために軍事施設（陸軍の下関要塞、海軍の防備衛所）がつくられていた。今でも当時の遺構が残っているようだが、現地の人に案内してもらい藪漕ぎをしなければならないから、簡単に行くことはできない。島の東側には丸い形の乞月山（こいづきやま）（149m）がそびえる。こちらにも軍事施設があった。

集落の坂を登っていくと、島民たちによって廃屋の解体作業が行われていた。空き家になり、放置されていた家のようだ。作業をしていた人に金比羅山への道を聞く。

少し登ったところに墓地があった。斜面に階段状に墓石が並び、集落を見つめている。区画数は 40 ほどあることから、島の全世帯がここに墓を持っているのだろう。集落の一番高いところに正覚寺という浄土宗の寺がある。住職はいない。法事の際は本土側から坊さんがくるようだ。墓からさらに道を進むと火葬場があった。人口 100 人に満たない島が独自に火葬場を持つのは珍しい。道路脇に貯水タンクが置かれている。本土側から海底送水管で送られてきた上水を配水するための施設と思われる。

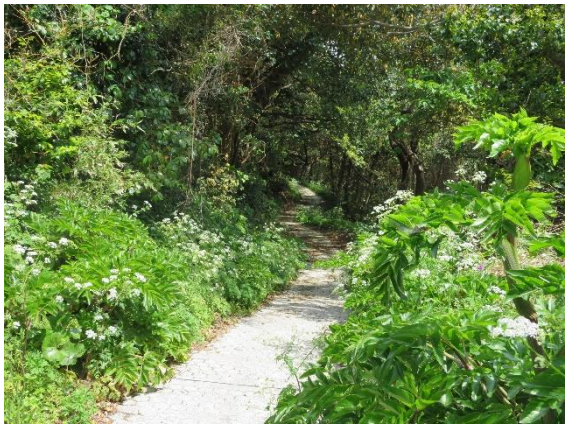
路傍にはツワブキが目立つ。ちょうど食べごろで緑の葉が輝いている。所々に家庭菜園があり、玉葱や馬鈴薯が育っていた。この島にイノシシは生息していないようで防護柵などは施されていない。近頃はイノシシのいる島が圧倒的に多いから、いない島に来るとほっとする。後で聞いた話では、海岸にイノシシの死体が打ち上げられていたことがあったそうで、どうも泳ぎ切れずに死んだようだ。

道は金比羅山の方角からはどんどん離れていく。どうもおかしいと思って引き返したが、別の道はなかったので、そのまま歩いて行くと道標があった。間違いなかった。金比羅山の

登り口までは軽自動車が通れる舗装道路が整備されている。途中、道端に腰かけて休んでいると、船で一緒だった同年配と思える人が上から降りてきた。この島には渡り鳥が多く、春と秋の年２回、バードウオッチングで訪れるのを恒例としているとのことだ。

金比羅山は標高 148mである。周囲に大きな木はなく、見晴らしがいいことで知られており、「しま山 100 選」に選ばれている。金比羅山の登山口には石の鳥居が建つ。鳥居をくぐって石積みの階段を登り、10 時 51 分に山頂に着いた。山頂にも石の鳥居があり、文化 12 年８月吉日という字がかすかに読み取れる。文化 12 年は 1815 年のことなのですでに 200 年以上経過していることになる。したがって石の風化が進んでいた。鳥居の奥に一対の灯籠と石造りの小さな社が鎮座する。

山頂から蓋井島の集落を一望できる。また六連島（むつれじま）（下関市）や北九州市の島々が見渡せた。15 分ほど休憩して、元の道を引き返す。島の反対側の海が見渡せる場所まで行くと、漁協自営の大型定置網が見えた。



金比羅山に向かう道（左）、山頂に立つ金比羅神社の鳥居と社（右）

エミュー

金比羅山からの山道は、後述する「四の山」（蓋井島では「山の神神事」という行事が４つの山で行われているがそのうちの一つ）のある場所にでた。ここから集落に下る道と、山へ入る道に分かれるが、山の道路を一周すべく山への道を進む。分かれ道の近くにエミューの幼鳥が飼われていた。

エミューはオーストラリア原産の鳥だが、飛ぶことはできない。アフリカ原産のダチョウよりも一回り小さい。エミューの飼育は 2002 年に島おこしの一環として、島民が始めたもので、「蓋井島地域興しエミュー飼育部会」が事業を担っている。すでに雛の孵化にも成功し、20 年に渡って繁殖を繰り返してきた。15 年前に訪れた時もすでにエミューは飼われていたので事業は定着し、着実に発展しているのだろう。

柵で囲われた牧場には幼鳥が多いところを見ると、孵化したエミューが大きくなるまで育てる場所のようだ。裏の倉庫にはトウモロコシの圧片が入った袋が置かれていたので、これがエミューの餌なのだろう。

ここで育てた成鳥は島の東側にある「エミュー牧場」に移されて、放し飼いにしている。体重 45 kgのエミューから約７～８リットルのオイルが採れる。エミューオイル（商品名は笑み優）として商品化され、島内では船着場近くの「みなと屋」で売られている。ちなみに

価格は１個（小さな化粧瓶ほどの大きさ）2,200 円（税込み）である。店のご主人は、北海道で売られているエミューオイルの半値なので価格設定を間違えている、とぼやいていた。

山の中を通る道は、かつて山を開墾しミカン畑が作られた時に農道として整備されたものである。道路は舗装されており、軽自動車なら十分通行可能だ。蛇足だが、島には軽自動車が 20 台ほどあるが、ナンバープレートのない車を何台も見かけた。小さな島によくあることだ。地図が不正確なのでどこを歩いているのかよくわからない。兎に角、道なりに進めば一周できるだろうと歩き続けた。道路の両側はすっかり原生林となり、竹林なども混ざる。一部はウバメガシが繁り、うす暗い。したがって展望できる場所はない。

そのうち「エミュー牧場」と書かれた立看板が現れた。地図によると島の東側には２カ所に分かれてエミュー牧場があるようだが、そのうちの１つだ。もう１カ所は確認できなかった。牧場では成鳥のエミューが１羽のんびりと歩いていた。地面は土が露出しているところをみると、生えた草をエミューが食べているのかもしれない。後に聞いた話では、エミューは道路から見えない奥の方にたくさんいるとのことだった。

エミュー牧場の前の道をそのまま下っていくと島の反対側のおいし浜に出て行き止まりとなった。もと来た道を戻り、反対側の山道を下っていくと集落のある海側に出た。

エミューの幼鳥（左）、山の中につくられたエミュー牧場（右）

山の神

山から下りてくる途中の森の中に「重要有形文化財／蓋井島山ノ神の森（一の山）」と書かれた石柱が建ち、その脇に枯れ木を円錐台状に積んだ見慣れないものがあった。森の中に入り近づいて写真を撮った。重要有形文化財の指定は、昭和 57 年 10 月 25 日のことである。

この円錐台の物体の正体は「山ノ神神事」に使われるもので、神が宿るとされる神籬（ひもろぎ）と呼ぶものであった。積み上げられた枯れ木の周りにしめ縄が巡らされ、その長さは 75 尋という。神籬の中には素焼きの甕と木製の桶、サザエの殻が供えられていた。平素は山に立ち入ることも、枯れ枝を拾うことも、切ることも禁じられている神聖な山だが、勝手に入ってしまったわけだ。

この一の山から少し下った左側に三の山があり、この一帯に一から三までの山の神の森がかたまっている。四の山は先に示したとおり集落東側にある田んぼの山裾に相当し、一から三の山とはだいぶ離れている。４つの山はそれぞれの祭りを世話する当元（とうもと）が世襲されており、一の山は藤永家、二の山は上野家、三の山は中村家、四の山は周防家である。当元家

は島で最も古い家系と考えられるが、山ノ神神事の際中心となる家であるだけで、祭事以外では何らの特権も持っていないという。蓋井島の全世帯はこの何れかの山に所属している。松沢らが調査した[1] 1956 年当時は 39 戸の家があり、それぞれ 10 戸ほどずつに分かれていた。ところがその当時に比べると、現在は 36 戸以下（小中学校の教員など島外から来ている人も含むため、みなとやのご主人の話では在来島民は 32 戸）になっているので、この山ノ神神事を維持するのが難しくなっているそうだ。特に二の山はメンバーが減っているという。後述する大空自治会長によると、市役所の教育委員会に各山に所属するメンバーの変更を打診したが色よい返事がなかったとのことだ。

山ノ神神事は辰と戌の歳、つまり７年目ごとに営まれる。これまで 280 年以上にわたり島民によって受け継がれてきた。神事は旧暦の 11 月吉日に３日間にわたって行われる。１日目の夕方、４つの当元の家では神迎えの神事があり、２日目は「大まかない」と言って当元の家に島の人々が集まって神とともに食事をとり、３日目は神送りの神事となる。神送りの行事は塩をまいて清めながら、山ノ神の森まで続く。神籬の前に朴の木で作ったお膳を 75 膳と柳の木で作った箸を用意する。しめ縄の長さも、お膳の数もなぜか 75 にこだわっている。神事が終わると供えられた餅が奪い合いになるそうだ。この祭事が催される時は、島から離れた血縁者も帰って来る。

祭事の費用は、春に木を採り、秋には各山共同でイサバという村の船に載せて本土側に薪として販売し、その販売代金が当たられたという。現在はどうなっているのか聞き洩らした。

枯れ木を円錐状に積んだ神籬と石柱（左）、神籬に供えられた素焼きの壺（右）

大型定置網

山から下りて海岸沿いを歩いて集落に向かうと、埋め立て造成された漁港用地に緑地広場と下水処理場があった。ここは漁業集落環境整備事業で調査したところだ。その先に野積場も整備されていた。以前来た時にはなかったから、その後埋め立てられたものだろう。野積場には定置網が干してあり、そこで１人の漁師が網を繕っていた。護岸には定置網の船も係留されている。

網を繕っていたのは定置網の船頭だった。少し話を聞く。この定置網は漁協自営の大型定置網で、乗組員は 10 人だ。このうち 30 歳代が３～４人を占める。定置網の乗組員が高齢化して困っている地方も多いが、この蓋井島は今のところ心配はなさそうだ。この日は日曜日で休みだったせいか、責任者である船頭が１人で働いていた。

上述したように定置網は漁港とは反対の島の北側の角ケ崎というところに敷設されてい

る。毎朝２時 30 分に出港して水揚げし、漁獲物は選別・箱立した後、小倉の魚市場に出荷する。賃金は歩合制で、職種に応じて均等に配分されている。乗組員は昼間、別の漁業に従事できるから、定置網の賃金がベースになり自営漁業による収入も加わり、収入は比較的安定しているものと思われる。

近年の大型定置網の生産額は後述するように 4,000 万円前後で推移している。20 年ほど前は１億円を超えていたので、大幅に落ち込んだことになる。マイワシが豊漁だったさらに 10 年前は、定置網に乗ればすぐに船を建造できるほどの収入があったというから隔世の感は否めない。

船頭によると定置網に入る魚は最近少なくなっており、しかも魚種が変わってきたという。イカ類は少なくなり、４～５年前まで比較的多かったブリも大幅に減少しているらしい。ところで蓋井島が漁業に依存し、しかも大型定置網が持てるようになったのは、戦後に入ってからのことであった。

江戸時代の蓋井島は、浦方部落（漁業部落）ではなく、地方（じかた）部落（農業部落）に属していた。したがって島に漁業権はなく、島民は農業を主業としていた。蓋井島周辺の漁場は本土側の安岡大浦、安岡脇浦、吉見浦、永田浦、吉母浦、室津浦の６ヶ浦の漁師たちによって開拓され、利用されてきた。つまり島民は島の周囲の水産資源を漁獲することができず、ごく一部の漁獲物を自家消費用に当てる程度に過ぎなかった。

1887（明治 20）年当時においても、島周辺は６ヶ浦の勢力範囲にあり、「島の人たちが前面の狭い湾外に少しでもはみ出て漁撈することも、彼等は絶対許そうとしなかった」という。当時の島の総戸数は 29 戸で、手漕ぎ船が 11 隻あるだけだった。島もそのうちの４隻は「木売舟」といって、島から切り出した薪を本土側に売りに行って帰りに生活必需品を買ってくる活動にあてられていたそうで、漁業用はわずか７隻しかなかったのである。

島民は目の前の水産物が島外の人に獲られてしまうことに耐えかね、島外６ヶ浦の大敷網は不当であるとして、1818 年から 1898（明治 31）年まで 80 年間にわたって漁業紛争が続いた。1897（明治 30）年にはとうとう裁判所まで持ち込まれ、翌年には６ヶ浦の漁業権を確認し、島側の妨害行為に対して金 100 円の賠償が申し渡され、島民側の敗訴に終わっている。[2)]

明治漁業法（旧漁業法）が制定された翌 1902（明治 35）年に島に漁業協同組合が設立される。旧漁業法では、定置漁業権、区画漁業権、特別漁業権、専用漁業権の免許が設けられるが、江戸末期の従来慣行を漁業権という形で権利化したものだった。島から地先水面の専用漁業権の免許願いが提出されるのは 1927 年４月のことであった。同年７月には角ケ崎の定置漁業権の免許申請をしているが、それでもなお島の独自性は認められていない。安岡浦外４ケ組合と協議し、その同意書の添付を以て初めて期間 20 ヶ年の申請に対して 10 ヶ年に限って免許がなされている。蓋井島の漁協に本格的な定置漁業権が免許されるのは、旧漁業権が国家補償でチャラになり、新漁業法が施行される 1950 年まで待たなければならなかったのである。1950 年の新漁業法施行による切り替え時の定置網は本土側の室津在住の阿部文蔵氏が経営していた。新法下の定置漁業権の出願に当たっては阿部氏個人と蓋井漁協、吉母（よしも）漁協、室津漁協の３漁協による共同出願という形になった。しかし優先順位の高い漁協は具体的な経営計画を示せなかったことから、結局、長門南部海区漁業調整委員会は阿部氏

を推し、同氏が免許を得た。ただ蓋井漁協は定置経営に強い意思を持っていたことから、1956 年の免許期間終了後、今度は蓋井漁協単独で自営の決意を固め、阿部氏と蓋井漁協の共願とし、蓋井漁協に免許されることになった。かくして 1956 年９月から５カ年間の定置漁業権を獲得するが、技術も経験も資金もなかったことから、当初の１年間は阿部氏が単独で経営した。その後、漁協自営の定置となり、現在に至っている。

島の裏側（北側）の定置網の漁場（左）、定置網の船と修理のために干している網（右）

山の道を一周して 13 時に船着場に戻った。島内には食堂がないので島で唯一の商店である「みなと屋」でカップラーメンを購入し、お湯を注いでもらい外のベンチで食べた。カップラーメンだけでは不足気味のため菓子パン１個と紅茶缶を購入する。ついでにエミューオイルも買った。

漁協

船着場の正面に漁協の２階建ての建物がある。蓋井島の漁協は上述したように 1902（明治 35）年に設立された。以来、島の経済や政治の中心的機関であるだけではなしに、1912（大正元）年には簡易水道事業を手掛けるなど経済事業にも大きくかかわってきた。

その後、戦後の水協法の制定に伴って蓋井漁業協同組合となり、さらに 2005 年８月の山口県漁協の発足に伴って、県漁協の蓋井島支店となっている。現在の組合員は正が 30 人、准は１人であり、15 年前に比べると正は９人、准は２人減っているが、その減少率は低い。漁協の職員は３人である。以前は生活物資の購買事業も行っていたが、現在はやめている。

蓋井島で営まれている漁業は、上述した漁協自営の大型定置網の他に採貝・採藻（磯見と素潜り）、一本釣、延縄、籠の各漁業が営まれている。2019 年の水揚金額は 1.16 億円であった。下関市内 27 支所・漁協（黒井と角島は県漁協と合併していない）の総水揚金額は 15.69 億円なので市内の生産額の７％を占めて５番目に多い。市内の有力な支店のひとつである。

最近７カ年間の漁業種類別の生産額の推移を表１に示したが、総生産額は１億円前後で推移している。最も多いのが大型定置網で、これに採貝・採藻、一本釣、延縄、建網、籠と続く。

採貝・採藻は磯見と素潜りに大別される。磯見は船の上から箱眼鏡を使って鉤で獲る方法で、漁期は 11～４月までだ（アワビは 12 月 21 日から解禁）。一方の素潜りは、①船を使う場合と②陸からエントリーする場合に分けられ、漁期は７月１日～９月１日までの２ケ月間である。何れもウエットスーツを着用する。操業時間は９時から 15 時と定められている。

①の船から使うのは、男の 20 名ほどで特に若手の漁師は全員が着業している。②の陸からのエントリーは女性で７人が着業している。磯見はナマコ、サザエ、アワビを主な漁獲対象とし、素潜りではアカウニやバフンウニなどのウニ類とサザエを主に採る。ウニ類は瓶詰に加工して販売する。

採貝・採藻にとって藻場が重要だが、大型多年藻のカジメは 14～15 年ほど前から姿を消し、磯焼けが続いていたそうだが、３～４年前から復活し始め、今年は試験的にカジメ刈りができるほど増えているとのことだ。カジメは刻んでから乾燥して出荷している。水に戻して煮つけて食べる。なおホンダワラは年による変動が大きく、最近は復活傾向にあり、磯見ができないくらい繁る海域も出てきたとのことだ。

一本釣の漁獲対象はサワラ、アジ、イカ、カツオなどである。サワラは曳釣りで冷凍のサンマを餌に使う。延縄はフグ、建網はサザエや磯魚類が中心、籠はアナゴ類を獲る。

漁獲物は原則として漁協がまとめて共同出荷している。下関の市場はセリ時間が早く間に合わないため、定置網の漁獲物と一緒に北九州市の魚市場に出荷している。南風泊（はえどまり）の市場などに個人で出荷するケースもあり、この場合は自分で運搬する。

漁協では 1980 年からアワビの稚貝を中間育成して、放流してきた。漁港の一隅に中間育成用の循流式水槽が整備されている。以前は毎年 10 万個ほどを放流していた。しかし餌にしていた天然のカジメが磯焼けで確保できなくなり、代わりに配合餌料に切り替えたのだが、コスト高になってしまい、そのため放流量を減らしたそうだ。現在は年間 2.0～2.5 万個を放流している。

山口県漁協蓋井島支所の全景（左）、アワビの中間育成施設（右）

表１　蓋井島の漁業種類別生産額　単位：千円

漁業種類	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
大型定置網	36,354	32,451	43,360	40,337	22,063	34,987	37,964
建網	6,098	6,094	7,124	7,136	10,271	7,896	8,867
かご	4,009	2,534	2,072	743	706	865	1,533
延縄	9,579	6,391	4,653	12,759	15,131	12,404	11,041
一本釣	34,580	33,333	36,011	28,078	27,948	22,959	26,685
採貝・採藻	31,156	32,063	33,987	23,600	27,120	26,122	29,575
合計	121,777	112,866	127,206	112,653	103,239	105,233	115,667

「下関市水産統計年報」（下関市）より作成

石垣の集落

蓋井島の集落は島の南側の１ヶ所にまとまっている。集落は傾斜地に形成されており、したがって石垣が築かれて団地状に家が立ち並ぶ。島にみられる典型的な密集集落だ。道路は人が歩くのが精いっぱいで、何とかバイクなら通れそうな幅しかない。赤褐色の瓦屋根の家が圧倒的に多く、石州瓦と思われる。上述したように 2002 年４月から漁業集落排水施設整備事業によって集落内に下水道が整備されている。

集落の東側は谷戸となっており、比較的平坦である。平坦な土地は農地として利用し、家は傾斜地に建てたようだ。もともと島の生活は農耕に依存していたためだろう。ただ、明治期より漁業に進出するようになり、半農半漁を経て現在は漁業が島民の生活を支えているのはすでに述べた通りだ。

2015 年国勢調査時の島の人口は 90 人、世帯数は 33 戸であった（みなと屋のご主人によると、現在の島民は 82～83 人、世帯数は 32 戸とのこと。多い時は 42 戸あったらしい）。就業者は 46 人で、このうち漁業が 21 人で約半分を占める。

農業を生業としてきた蓋井島は基本的に食料を生産する農地面積に人口が規定されていた。したがって江戸時代までは島の世帯数は 18 戸と定められ、分家は許されなかった。しかし半農半漁そして漁業への依存度が高まると、漁業による現金収入が分家を可能にする。松沢寿一らが 1956 年に調査した当時の蓋井島の全戸数は 48 戸で、この中には小中学校の職員宿舎１棟、校長住宅１戸、灯台守宿舎２戸、浄土宗正覚寺が含まれる。人口は 237 人で、このうち在来島民は 39 戸、195 人であった。この時代が人口のピークで、世帯当たりの平均家族数は 4.85 人、頻度が最も多いのが５人家族の９戸で、11 人や９人の家族もいた。そして当時の蓋井島の社会は外部からの通婚者はまれで、血縁共同社会を形成していた。

その後、若い人を中心に島を離れ、人口は半減するが、世帯数はわずかな減少にとどまっている。したがって集落内に空き家は目立たず、建物が解体され更地になった土地が数区画ある程度だ。

蓋井島の集落（左）、石垣が組まれた敷地と狭い道路（右）

島には少し以前までは５軒の民宿があったが、経営するおばあさん達が高齢化するに伴い廃業が相次ぎ、現在は「周防」と「おけや」の２軒だけになっている。「おけや」は若夫婦がやっていて、ご主人は料理学校で学び以前は島外で料理人として働いていたが、10 年ほど前にＵターンして民宿を始めた。この民宿に泊まるべく何回か電話したが、コロナ禍で警戒心が強く、何れも断られてしまった。今回も島に泊まる予定でいたが、受け入れる民宿

がなく、日帰りになった次第である。「おけや」のご主人は漁師であり、兼業の民宿収入はあまり当てにしなくてもよいのかもしれない。

田んぼ

集落を上まで登り、集落と蓋井小学校の間の谷戸にある田んぼを見に行った。この谷戸一帯は「田の口」と呼ばれている。緩やかな傾斜地に棚田が連なり、水は山からの湧水を水源としているようだ。そろそろ田植えの準備のかかろうかという時期にあり、1組の夫婦が田や畔の草刈りをしていた。ご主人の方の刈払機にガソリンがなくなり、手を休めたところだったので、お話を聞く。偶然にもこの男性は、島の自治会長を務める人で、大空正治といった。

大空さんは 66 歳になる。長門の水産高校に進学し、卒業後の 1973 年に島に戻り、半農半漁で生計を立ててきた。後述する花嫁ブームの世代にあたり、奥さんは下関から嫁にきた。基本的には漁業で生計を立てているが、自給用の米を毎年つくっているとのことだ。コンバインも保有しており、けっこう農業機械に投資をしている様子で、米は買った方が安いが先祖から引き継いだ土地を守るために耕作しているという。奥さんは今年の３月まで漁協に勤めており、定年退職になったばかりという。

現在、島で米を作っているのは大空さんを含めて４戸だけである。もともと「一ノ山」から「三ノ山」にかけての一帯の谷戸は「筏石」と呼ばれ、やはり田んぼがあったが今では草木に覆われ、現在、耕作しているのは集落に近いこの田の口だけになっている。

蓋井島はもともと農業を中心とする島だったことはすでに述べた。以前は麦とサツマイモ、米がメインだったが、貨幣経済化が進むと、ミカンや花卉（マーガレット）などの換金作物に挑戦する。また牛、鶏などを飼った時代もある。このうちミカンが最も有望でミカン栽培農家は 10 数戸に増えた。しかしオレンジの輸入自由化で価格が下る。またミカンの木を切ると補助金が出たので、これを契機に栽培をやめた。現在も一部にミカン畑が残っているが自家用だという。この当時は漁業による現金収入が多かったから、農業へ依存する必要はなく、したがってミカンに固執しなかったのだろう。

島にわずかに残る田んぼ（左）、作業をしていた蓋井島自治会長の大空正治さん（右）

1956 年末時点の蓋井島の農地面積は、田が 75 反６畝、畑が 86 反２畝であったが、現在は田と畑がそれぞれ 10 反ほどに激減している。

もちろん大空さんの現在の主業は漁業である。１月から４月下旬にかけて磯見でサザエ、

ナマコなどを採り、その後、６月ごろまでイカ釣り、６～12 月はアジ釣り、この間の 11 月にサワラの曳釣りを行う。また 12 月は磯見でアワビ、サザエなどを採る。

ベビーブーマーのその後

蓋井島では、1984 年ごろから５年ほどの間に次々のお嫁さんが島にやって来て 12 組が結婚、３年間に 14～15 人の子供が生まれ、島はベビーブームに沸いたという。[3] 大空さんによると、実際はそれよりも多く、14～15 組のカップルが誕生し、23 人の子供ができたという。当時、本土側の吉母よりも子供の数は多かったそうだ。

もともと蓋井島は島内の男女が結婚する血族社会であることはすでに述べたが、高度経済成長を経ると、若い女性たちは島を出て外で働くようになり、島に適齢期の若い女性がいなくなった。嫁不足が島の社会を維持する上で深刻な問題になったのである。

お見合いや交流会など女性と知り合う機会はあったが、如何せん漁師の休みは時化の時に限られていたので予定がたたずデートもままならなかったらしい。そこで第１と第３土曜日を全島一斉の休漁日として、交際できる条件を整備したところ顕著な成果をもたらし、次々と島外から嫁さんがやってくる「花嫁ブーム」が訪れる。

この話は以前来た時に聞いていたので、30 余年を経た今日、その時に生まれた子供たちはどうなったのか興味があった。自治会長の大空さんと奥さんはその世代であることは既に述べたが、大空さん以外にも何人かに聞いたが、当時のベビーブーマーのうち男の半分は島に残り（８人）、漁師をしているという。また最近は３人がＵターンしてきた。

表２は年齢階層別の男子漁業就業者数の推移を示したものである。花嫁ブームの時の男子就業者は漁業への定着率が高く 14 人前後の塊を形成している。この時に生まれ、漁業に就業したと思われる人は 2003 年から加わって６名になり、さらに増えているようだ。高齢化率が圧倒的に高い島が多くを占めるなか、蓋井島では若手後継者がそれなりに確保されているのは、この時の成果が今日に反映されていることを物語るものである。

表２　年齢階層別の漁業就業者数の推移

	1988	1993	1998	2003	2008	2013	2018
合計	71	62	57	45	47	40	34
男子	42	38	33	28	31	29	26
15～19	0	1	0	1	0	0	0
20～24	3	1	1	0	2	2	0
25～29	7	3	1	1	2	2	2
30～34	5	7	3	1	1	2	2
35～39	4	7	6	2	1	1	2
40～44	3	3	5	6	2	1	1
45～49	2	2	3	5	7	2	1
50～54	2	2	2	2	5	7	2
55～59	7	1	2	1	2	5	6
60～64	5	5	1	2	2	2	6
65～69			5	1	2	1	2
70～74	4	6	4	4	2	2	1
75～			0	2	3	2	1
女子	29	24	24	17	16	11	8

「漁業センサス」（農水省）より作成。黄色が花嫁ブームの時に結婚した人、青色がその子供と推定される。

蓋井島は長い間、血族結婚による血縁共同社会をつくってきたが、この時代から一気に通婚範囲が拡大し、新たな血が増えたことになる。花嫁ブームのその後の分析は、他の島にも大いに参考になることなので、時間が許せばもう少し綿密な現地調査をしてみたい。

小学校

農地の道路を挟んだ山側に小学校がある。小さな島には珍しく校庭は比較的広い。また体育館やプールも整備されている。

上述したベビーブームのころ、小学校の児童数は 20 人ほどに増えたが、その後減少しつづけ、2005 年には１名となった。休校の危機に直面することになるが、翌年、鹿児島から子供３人の家族が移住してきたことにより休校は避けられた。その後、ベビーブーム世代が島に戻ってきたことから増加に転じ、現在は９人になっている（１年生：３人、３年生：３人、５年生：２人、６年生：１人)。先生は５人で、１年生と３年生、５年生と６年生の複式授業が行われている。一方未就学の子供が５人、もうすぐ１人生まれる予定なので、当面休校になる恐れはない。

島には幼稚園はないので、本土側の幼稚園に通う人もいるらしい。また中学校もない。吉見に設けられている寄宿舎（下関市営）から吉見中学校に通学することになる。島に子供が比較的多くなってきたので、中学校をつくろうかという話も出てきているらしい。多くの島で人口の減少と高齢化が進むなか、蓋井島は例外である。

蓋井小学校の全景（左)、蓋井小学校の入口（右）

小学校から海まで出て、八幡神社に寄る。石の鳥居には文化 12 年と書いてあり、金毘羅山山頂の鳥居と同じ時に建てられたようだ。脇に「日独戦役記念」「忠霊塔」「日露戦役紀記念」の３つの石碑が並んで建っていた。長い階段を上ると立派な拝殿と本殿が続き、最近建て替えられたようで新しい。

蓋井島を 15 時 50 分に出発。帰りの船には私を含めて３人しか乗らなかった。吉見港に 16 時 25 分に到着。在来線に乗り、下関、小倉を経由して新幹線で自宅に戻った。

【文献】
1) 松沢寿一・国分直一・中村省吾・植松一郎 (1957) : 蓋井島集落の歴史的、社会的構造. 水産講習所研究業績第 246 号. 1-45.
2) 浜口二郎 (1985) : 蓋井島をめぐる漁業権訴訟. 郷土 31. 下関郷土会. 115-131.
3) 岩川隆 (1989) : 島にはお嫁さんがいっぱい　山口県蓋井島, 家の光. 家の光協会. 東京. 80－85.

石垣の集落、エミュー、大型定置網、山の神、ベビーブーマーのその後